

正帰還と負帰還

正帰還というのは英語ではポジティブフィードバック、負帰還はネガティブフィードバックである。もともとは電子回路の専門用語(多分)だ。シーソーを思い浮かべて見ると、この2つの言葉の意味がわかり易い。まず正帰還というのはシーソーの真ん中に大きな砂袋を置いたようなものである。何かの拍子にちょっとシーソーが傾くと、砂袋は傾いた方へちょっと動く。その結果さらにシーソーはバランスをくずす方向に傾き、その結果さらにシーソーの傾きが大きくなり、あっという間に砂袋は落ちてしまうだろう。これに対して、不帰還と言うのは、シーソーの両端にばねをつけてバランスをとっているような状態のことである。たとえシーソーがちょっと傾いてもバネの復元力のため傾きを小さくなるような力が働きシーソーはもとの位直にとどまることができる。

一回動き出すとすごい速さで動き行き着くところまで止まらないのが正帰還の特長だ。下手をすると機械が壊れてしまうこともある。マイクをスピーカーに近づけた時に大きな音が出るハウリングも正帰還のためだが、歪(ひずみ)が大きくあまり健康的な感じはしないだろう。一方、不帰還はノソノソしていてなかなか動かないが、何となく安定感がある。健全な感じがすると言ってもよい。実際、アンプに負帰還を組み込むと応答性は悪くなるが音は格段に良くなるのだ。

ところで、小売業では20%の売れる商品をできるだけ伸ばし、売れない80%を切り捨てる戦術がよく行われるという。この戦術、何となく正帰還に似ていないだろうか。売れ行きの良い製品をさらに売れるように店内の良い場所にディスプレイすることによって、もっと売れるようにする。他方、売れ行きの悪い商品は隅っこに追いやられて更に売れなくなってしまうようにする。まさにポジティブフィードバックだ。できない仕事はどんどんアウトソーシングしてしまうのも何となく同じだ。現代はまさに正帰還の時代なのである。

昔のように、売れない商品を何とか頑張って売れるようにするとか、かつてのNHKの人気番組「プロジェクトX」みたいにできない仕事に歯を食いしばって取り組むと言うのは、どう見ても負帰還タイプの仕事の仕方である。確かに、負帰還的やり方はノソノソしていて動きが遅い。ドッグイヤーと呼ばれる現代の時間の進み方にはまったく合わないのも当然ではある。とにかく正帰還というのはスピードが速い。この一点の理由で、世の中は皆正帰還化してしまった。しかし、上にも述べたように正帰還には不健康な感じがどうしても伴う。動き出すと止まらないとか歪が大きいとか、どうも危うい。これも何となく現代の雰囲気とマッチしている感じがすると言ったら言い過ぎだろうか。みんな、急げ急げと慌てて仕事をしている。スピードを上げるには正帰還作戦が一番だ。でも、正帰還に伴う「不健康さ」ということをみんな忘れてしまっているのではないか。どっかにちょっと負帰還な部分を残して置くことが大切なのかもしれない。



(TGES 安部健)